

# 玖也から芭蕉へ

## —『道の記』と『おくのほそ道』の連関性—

山田和則

### 一 はじめに—方法論的仮説

前稿において松山玖也の俳諧紀行文『道の記』を紹介し、これが西鶴に影響を与えた道筋を見据えた。本稿では玖也と、西鶴の同時代人である芭蕉との関わりについて考える。

志田義秀は昭和十七年（一九四二）に刊行した『俳句と俳人と』の中で、芭蕉前後に奥羽を旅した俳人を概観し、芭蕉に対する影響を探っている。宗因に次いで早くに奥羽へ赴いた俳人として、玖也について比較的多く言及しているが、この頃にはまだ玖也が書いた奥羽紀行の存在は知られておらず、『桜川』や『継尾集』所収の発句によって動向を追うのみであった。新田孝子により玖也自筆の『松山坊秀句』が発見紹介されるのは、志田没後およそ二十年を経てのことである。そして前稿で述べたように、近年『松山坊秀句』の異本『道の記』が見つかった。こうして資料が揃ってきた現況において、あら

ためて玖也の紀行と『おくのほそ道』との関係を考えてみたい。

新出『道の記』は三部（吉野・奥羽・鎌倉）からなる玖也の俳諧紀行文の写しであり、第二部の奥羽紀行が『松山坊秀句』に相当する。西鶴は「幽霊の足よは車」（『西鶴名残の友』所収）において「大坂の玖也、岩城にめされし折ふし、奥筋の名所日数かさねて詠めつくし、この所（象潟）殊にあかぬさまに『道の記』にも書けり」と記したが、新出資料の第一部・吉野の部分に「足よは車」や「膏薬」といった「幽霊の足よは車」の鍵となる語があり、なおかつ象潟を含む奥羽紀行も併録することから、西鶴はこの玖也の紀行文から発想を得たことが明らかとなった。『道の記』は仮称であるが、袖書に後人の書き入れとして「道の記」とあり、また西鶴がその名で呼んでいることから、これを『道の記』と称することとする（以下特に断りのない限り、『松山坊秀句』と

合わせた総称としてもこの名を用いる。

さて、『松山坊秀句』が発見された後も、玖也が『おくのほそ道』との関連で語られることはほとんどなかった。<sup>(邦)</sup> というのも、芭蕉が『道の記(松山坊秀句)』から影響を受けたという明示的な指標がどこにもないからである。だが、芭蕉が先行文献を明示しないことと、芭蕉がその文献を読んだか否かということとの間には、因果関係はない。例えば、『おくのほそ道』における壺の碑や松島を説明する記述などに、大淀三千風の『松嶋眺望集』を参照した痕跡が見られるという。<sup>(邦)</sup> 三千風の名前は曾良の『随行日記』に「三千風尋ルニ不知」とあるが、『おくのほそ道』本文には、三千風門下の画工加右衛門の名が記されるのみである。このことは、『おくのほそ道』を執筆するにあたり、芭蕉が先行文献を参照していたこと、そしてそれが必ずしも明示的に表されているわけではないということを示している。こうして想定される芭蕉の参照文献の中に、『道の記』が含まれていたのではないだろうか。

そもそも、芭蕉以前に奥羽を旅した記録は少ない。宗因に『松島一見記(奥州塩竈記)』はあるが、松島どまりであり、その他には和歌や発句によって歌人・俳人の動向が断片的に知られるのみである。そうした中で、象

潟まで足を伸ばした玖也の『道の記』は当時貴重な奥羽紀行だったと考えられ、もし手に入るものであれば、参照されてしかるべき資料であっただろう。

では、物理的に芭蕉が『道の記』を読むことが可能であったかどうか。まず言えることは、現在こうして自筆・写本の二本が伝存していることから判断して、ある程度は流通していたのだろう。西鶴が引用し読者に提示したことも、読者に『道の記』の知識があることを前提にしたと考えられる。また、宗因も玖也の死に際し、追善句「ことづてよ冥土の道の記時鳥」(『梅翁宗因発句集』所収)を寄せた。ここに見られる「道の記」は、生涯にくつもの紀行文を残した玖也の著述活動をふまえ、一般名詞としての「道の記(紀行文)」を表すと同時に、中でも全句が郭公(時鳥)の題で構成された『道の記』第二部(『松山坊秀句』)を想起させるものだろう。

こうして、大坂周辺の談林俳人を中心に『道の記』が読まれていたものと見られるが、<sup>(邦)</sup> 遠く奥羽でも読まれていた可能性がある。そもそも玖也の奥羽紀行は、『桜川』編纂のために岩城平藩の内藤家に寄宿していた際、さらに奥へと足を伸ばしたもののだが、その性質上、旅の記録が内藤家に収められていても不思議ではない。また、酒田の淵庵不玉が編纂した『継尾集』には『道の記』所収

の「袖掛の（や）涙からなんほととぎす」「夏の月やたらの木嶋にかかり舟」が収められているが、これらは他出を見ない句であり、不玉は『道の記』から採ったものと見られる（ただし後者は『松山坊秀句』の補遺の部分にしかない句であり、不玉の手にあったのは『松山坊秀句』系統の本であったと想定される）。芭蕉は『笈の小文』の旅に出るにあたって内藤露沾から「時は冬吉野をこめん旅のつと」の餞別句を賜るほどの親交があり、また『おくのほそ道』の旅では不玉のもとを訪ねてもいる。露沾や不玉からすれば、芭蕉が奥羽を旅すると聞けば、その先人として玖也を連想したのであろうし、とりわけ不玉のように旅の途中で芭蕉と話す機会があったならば、当然その話題にもなっただろう。そうした状況から考えると、芭蕉が『道の記』を目にすることは十分に可能であったと思われる。

こうして、芭蕉が『道の記』を読んでいた可能性について見てきたが、もちろん芭蕉がそれを読んだというだけでは、影響関係にあるとは言いがたい。前述『松嶋眺望集』の参照が、作品に影響を与えたとは言えないのと同じである。そして表面的には、『道の記』と『おくのほそ道』との間に、明らかに表現を引用したような箇所は見えない。おそらく旧来的な影響論の基準からすれば、

芭蕉は玖也の影響を受けていないとみなされよう。

しかし、ハロルド・ブルームが「影響の不安」として示したように、詩人が自身の作品のオリジナリティを確保するために、先行詩人からの影響を恐れ、影響の痕跡を隠すことは十分にあり得ることである。<sup>(注1)</sup> もっとも、オリジナリティの意識が希薄な近代以前の日本文学には、「影響の不安」は当てはまらないという考え方もあろう。しかし、旧来の貞門・談林から脱却して蕉風を確立せんとした芭蕉の立場からすれば、談林の重鎮であった玖也のことを、現代の我々が想像する以上に強く意識していたとも考えられる。

だが、そのようなネガティブな形での影響は、徴証として現れにくいものである。そこで、玖也の芭蕉に対する影響についてはひとまず可能性として指摘するにとどめ、その上で両者の比較検討を行いたい。以下に述べていくように、あるテーマをめぐる、その扱われ方において両者は好対照をなす。その異同の中から、玖也と芭蕉の連関性を探っていききたい。

## 二 『伊勢物語』をめぐる

芭蕉が奥羽への旅に出るにあたり、かの地を訪れた能因や西行を意識したことは明らかである。例えば岩沼で

は「武隈の松にこそ目さむる心地はすれ。根は土際より二木に分かれて、昔の姿失はずと知らる。まづ能因法師思ひ出づ。往昔、陸奥守にて下りし人、この木を伐りて名取川の橋杭にせられたることなどあればにや、『松はこのたび跡もなし』とはよみたり」と記し、象潟については「まづ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡を訪ひ、向かふの岸に舟を上がれば、『花の上漕ぐ』とよまれし桜の古い木、西行法師の記念を残す」と書く。この他にも、笠島での「藤中将実方の塚はいづくのほどならん」、月山での「行尊僧正の歌のあはれもここに思ひ出でて」など、陸奥に赴任したり、諸国を旅した王朝歌人の名前を引いている。

そして陸奥に縁のある歌人といえば、もう一人忘れてならない人物がいる。『伊勢物語』の主人公、在原業平である。だが、『おくのほそ道』では業平の名は引かれていない。「明くればしのぶもち摺りの石を尋ねて、信夫の里に行く」とあるように、芭蕉はこの旅で信夫を訪ねているが、この地は信夫摺の狩衣の裾を切つて歌を書く初段や、陸奥の地で「信夫山忍びて通ふ道もがな」と詠む十五段など、『伊勢物語』を象徴する場所であるにもかかわらず、それへの言及はない。それ以前の旅では、『杜若我に発句のおもひあり』（『俳諧千鳥掛』所収。『野

ざらし紀行』の旅の途上で詠まれたもの）や「杜若語るも旅のひとつ哉」（『笈の小文』）などの句において自身を業平になぞらえているのを見ても、ここに業平の名が見えないことが、かえって不自然に感じられるほどである。

かといって、『伊勢物語』が完全に意識の外にあるというわけではない。白石悌三によれば、『おくのほそ道』というタイトル自体が、『伊勢物語』から派生した地名「蕨の細道」（宇津の山）と呼応して、アイロニカルな俳意を響かせているという。『伊勢物語』の業平は、自ら都を離れつつも、常に都を偲びながらの旅であったが、『おくのほそ道』の場合は、「李白詩をふまえて、冒頭からそのアンチテーゼを打ち出す。百代の時間のまえに万物は無常の存在である。どこに定住しようとも常住は叶わぬ以上、『都』をはじめとし全空間は仮住の宿にすぎない。それなら時間にさからって逆旅を求めるより、光陰とともに不断の旅を続けることが、造化の意志に叶った純粋な在り方ではないのか。つまり、芭蕉は『伊勢物語』を旧来的・伝統的な旅のイメージとして意識しつつ、そこからの脱却を企図した、「新しい旅の本意をえがいてみせた意図的作品」だというのである。

芭蕉が時代の遠く離れた『伊勢物語』を意識せざるを

えないのは、『伊勢物語』以降に書かれた紀行文が、こぞって『伊勢物語』のイメージを固持してきたからである。例えば、中世歌人の信生（塩谷朝業）が京から鎌倉、さらに善光寺へ足を向けた旅の記録『信生法師日記』には、『伊勢物語』に対する憧憬が強く表れている。八橋（八橋）では「杜若世々を久しく隔ても昔の跡の色ぞ残れる」と詠み、業平と同じ風景を見ていることを強調する。また宇津の山では、山中で山伏に会い、「夢にも人の」と詠んだ業平のことを思い出している。善光寺への途上で浅間山の煙を見て詠んだ「名に立つるこれや浅間の夕煙晴れ行く峰に残る白雲」も、『伊勢物語』八段の業平歌「信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ」をふまえたものであろう。また阿仏尼の『十六夜日記』でも、宇津の山はもちろんのこと、『伊勢物語』とは直接関係のない鳴海瀉において「隅田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、嘴と脚と赤きは、この浦にもありけり」と記すなど、中世の紀行文には業平の旅を想起する箇所が散見される。

そして、業平を自身になぞらえるのは、玖也も例外ではない。寛文四年（一六六四）、玖也が宗因とともに大坂から江戸へ向かった時の記録『東下り富士一見記』（東下り）は、『伊勢物語』や、前述の信生や阿仏尼らの東下りとも行

程が通う。当然のように『伊勢物語』引用が見られるが、ここで注目したいのは、『東下り富士一見記』は『伊勢物語』を引用していることにより、一見中世紀行文の流れに連なる、芭蕉からすれば古いタイプの紀行文のように見えるが、つぶさに見ると中世紀行文とは異なる視点が見られることである。例えば、富士山を眺めた後、「これよりはるかに弓手の方を見れば、信州駒ヶ岳こと山を離れて、これも雪花やかにそびえたり。在五の『遠近人の』と眺められしはこの山にやあらん、浅間岳こなたよりは見えぬ。いと不審なきにしもあらず」と、浅間山について記している。『伊勢物語』では第七段で伊勢・尾張、第九段では三河・駿河・武蔵の国名が出てくるため、業平の東下りは東海道を下ったものと想定されている。浅間山はこれに挟まれた第八段で語られるため、まるで東下りの途上、東海道から見えるかのように錯覚してしまうが、信濃国は東山道に属し、東海道からは見えない。玖也は、この当たり前の事実を指摘している。

ただの勘違いか、あるいは戯れ言のようにも聞こえるが、玖也の記述は、『伊勢物語』をなぞった旅が、現実には、あるいは少なくとも江戸の世においては、不可能であることを示している。同じく『伊勢物語』に出てくる八橋について、「今の道よりはるか左の方に、昔の八

橋の跡あり、行きてみるに、橋もなく沢もなし、その形とて石ばかりぞ残れる。さしもの名所なれど、さるべき趣向もなければ、徒らに過ぎる、口惜し」と記す。このように、名所として謳われてきたはずの歌枕の現実を、玖也は明らかにしているのである。

前述の信生法師が八橋に着いたのは二月で、杜若の季節には早く、業平と同じ景色を体験したわけでもないにもかかわらず、「杜若世々を久しく隔てても昔の跡の色ぞ残れる」と詠んで、そこに業平の痕跡を感じようとした。また『東関紀行』の作者（鴨長明と思われる）は秋にここを訪れ、「そのあたりを見れども、かの草（杜若）とおぼしきものはなくて稲のみぞ多く見ゆる」としながらも、「花ゆゑに落ちし涙の形見とや稲葉の露を残しおくらむ」と詠んで、露からイメージを膨らませ、それを涙の形見として『伊勢物語』の世界を共有しようとしている。このように、中世の旅人たちは想像力によって歌枕を補完してきたのだが、玖也は冷静に現実の歌枕を観察し記述している。

さらに宇津の山では、信正や阿仏尼が業平と同じように山伏に出会い、『伊勢物語』の世界を体験しているのに対し、玖也は「宇津の山を行くに、昨日の雨の名残、道いとあしくて苦し、文書きてつくべき古郷人にもあは

ず」と書く。山中で人に会わなかったのは偶然であろうが、ここでも玖也は業平になれなかった。こうして玖也は、業平のような旅、業平のような体験が、実際には不可能であることを示しているのである。

このような、『伊勢物語』に象徴される王朝的なみやびの世界が、後世では崩壊していることに対する思いは、『おくのほそ道』にも見ることができ。前述の「しのぶもぢ摺りの石」について、「昔はこの山の上にはべりしを、往来の人の麦草を荒らしてこの石を試みはべるを憎みて、この谷に突き落とせば、石の面下さまに伏したりといふ。さもあるべきことにや」と記しているのがその好例であろう。壺の碑では歌枕一般について「昔よりよみ置ける歌枕多く語り伝ふといへども、山崩れ、川流れて、道改まり、石は埋もれて土に隠れ、木は老いて若木に代はれば、時移り、代変じて、その跡たしかならぬことのみ」だと述べ、同じく歌枕の末の松山について「松の間々皆墓原にて、翼を交はし枝を連ぬる契りの末も、つひにはかくのごときと、悲しさもまさりて」と記す。さらにこの観点で、『おくのほそ道』のハイライトの一つである、平泉の「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す」につながっていく。玖也が『伊勢

物語』を通じて表現したことを、芭蕉は『伊勢物語』から離れつつ、繰り返し表現しているのである。

こうした『伊勢物語』に対する対照的な距離の取り方は、別のところにも表れる。『伊勢物語』を象徴する語に「色好み」があるが、『東下り富士一見記』を『伊勢物語』に結びつけて考えると、色好みの性質も同じく『東下り富士一見記』の中に見ることができるといえる。

赤坂に着く。いとおかしげにけづらひたる女どもあまた出て、往來の袖を引きとどむるに、いまだ日高なれど、さすがにとまるも有るべし。衣々（後朝）の際はいかがはあらん。

くふて立つ湯づけ（夕つげ）の鳥のあか坂の  
あかぬわかれやおもふ旅人

原川、掛川、曾禰河をわたり、西坂（日坂）を上る。この所の土産とて、見にくからぬ女のとりどりにいとなむを、人々立ちよりて何ぞとたはぶれければ

ちぎるとや人手を握る蕨餅

いわゆる飯盛女に目を留めた描写だが、玖也は業平的な色好みを、近世の旅文化に置き換えて表現している。

では、芭蕉の旅ではどうか。市振で遊女と同宿し、「一つ家に遊女も寝たり萩と月」と詠むが、この句の情趣は色好みとは別のところにあると思われ、その意味で芭蕉は色好みを排していると言えよう。つまり、玖也は『伊勢物語』のイメージを近世的な文脈に変換し、一方芭蕉は『伊勢物語』のイメージを棄却することで別の情趣を発見しようとしている。方法は対照的であるが、ともに新しい時代の文学を作りだそうとしていた姿勢を見て取ることができるとはいえないだろうか。

さて、このような観点をふまえ、『道の記』と『おくのほそ道』とを比較したい。奥羽の旅を終えて仙台に帰り着いた玖也が、亡くなった両親の夢を見る場面を、新出の『道の記』から引く。

此日、未くだるほどに仙台に帰り入るに、やうやう心落ち居て、しばし古里の心地するもはかなし。行きてまるをぞ世の中の果てならむ、いづことかささん。いにし十六日は予が悲母の忌日なり。暁がた二親正しく夢に見え給ひて、なつかしげに物語りなど聞こえしを、しばし打ち驚くやうにて覚めぬ。思ふに、我かく身をよくなきものになして、かかる遠き

國の果てまでもあくがれめぐらひぬるを、うしろめ

たう思ひてかくは見え給ふにや、と名残りも慰めが  
たう涙おさえがたし。

旅に人生を重ねる述懐は、芭蕉のあり方にも通ずるものがあるが、ここで注目したいのは、「我かく身をよくなきものになして、かかる速き国の果てまでもあくがれめぐらひぬるを、うしろめたう思ひてかくは見え給ふにや」と自らを省みている点である。これは明らかに『伊勢物語』第九段の「そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり」、および同段の「その河（隅田川）のほとりにむれるて思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな」とわびあへるに」をふまえたものである。また、『道の記』『松山坊秀句』のどちらにも収められていないが、おそらく同じ旅での詠句に「京のつとよ姉齒の松のほとぎす」がある（『桜川』所収）。これが『伊勢物語』第十四段の「栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを」を引いていることは明白である。

これと、『おくのほそ道』の次の箇所を対比させたい。  
十二日、平泉と志し、姉齒の松・緒絶の橋など聞き  
伝へて、人跡まれに、雉兔藪の行きかふ道そこと

も分かず、つひに道踏みたがへて石の巻といふ港に出づ。「こがね花咲く」とよみて奉りたる金華山、海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ち続けたり。思ひがけずかかる所にも来たれるかなと、宿借らんとすれど、さらに宿貸す人なし。やうやうまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。

姉齒の松という、『伊勢物語』にも登場する歌枕を指しながら、道に迷って石巻に出る。「思ひがけずかかる所にも来たれるかな」は、第九段の「限りなく遠くも来にけるかな」とわびあへるに」に拠るとされるが、ここでは道に迷った末の感慨に変えられ、『伊勢物語』のイメージをずらしている。

曾良の『隨行日記』によると、「十日 快晴。松嶋立。馬次、高城村、小野、石巻。仙台より十三里余」とあって、予定どおり石巻に着いた書きぶりであり、けっして別の場所を目指しながら偶然石巻に着いたようには思われない。通説では、道に迷ったというのは虚構とされる。姉齒の松に緒絶の橋を並べるのは、『源氏物語』藤袴巻の「妹背山深き道をばたづねずて緒絶の橋にふみまどひける」から「道踏みたがへて」という状況を導くための



ものという。

だが、この発想はどこから来たのか。『道の記』では、『伊勢物語』を意識した「身をよくなきものになして」の後に、「かかる遠き国の果てまでもあくがれめぐらひぬる」と続くが、この「あくがれめぐらひぬる」の語意から、さまざま巡回するイメージを導くことができる。

『伊勢物語』と、さまざま歩く彷徨のイメージとが結びついたこの文章構成は、姉齒の松を指しながら道に迷ってしまう『おくのほそ道』の展開に通ずる。『伊勢物語』を媒介としたこの奇妙な対応は、玖也の記述が旅のクライマックスとして最も読者の目につきやすい箇所であることをふまえると、芭蕉がこの記述に目を留めて自身の発想のもととしたのではないかと考えたかも知るが、ここではその可能性の指摘にとどめたい。だが、当世的な感覚で『伊勢物語』を取り入れた玖也と、『伊勢物語』をずらしてそこから脱却しようとした芭蕉とは、一見対照的な姿勢のようでもあるが、『伊勢物語』を越えて新しい紀行文学を作ろうとした方向性においては、けっして大きな隔たりはないと見る事ができよう。

### 三 地名句と歌枕

こうして、『伊勢物語』をめぐる玖也と芭蕉の共通性・

非共通性を見てきたが、同じように地名句の扱いにおいても、両者の間に興味深い連関が見える。

芭蕉の俳諧紀行文の中でも、『おくのほそ道』の特徴の一つは、地名句が多いことだとされる。石川真弘の調べによると、『野ざらし紀行』『笈の小文』は俳諧紀行ながら地名を詠んだ句が相対的に少なく（前者は全四十五句中八句、後者は全五十四句中十六句）、しかも縁語掛詞を用いて地名を詠み込んだ句は『野ざらし紀行』で一句、『笈の小文』では二句しかない<sup>（注15）</sup>という。

これが『おくのほそ道』では、地名を詠んだ句は全六十二句の約半数にあたる二十八句になり、うち十六句に縁語掛詞が見られると石川は指摘する（ただし地名掛詞ではないものも含まれる）。この傾向について、「『おくのほそ道』の旅は、先の二つの紀行のように帰省の序でというような便宜的に行われたのではなく、歌枕を訪ね、その土地に通う古人の詩心に触れることによって俳諧文学の確立を目指した文学追究の旅であった。したがって『おくのほそ道』に歌枕などの地名を詠み込んだ句を多く収録する結果になったのは、当然のことである」と述べる。

しかし、先に見たように、歌枕である姉齒の松や織絶の橋には行っておらず、また塩釜や有也無也の関など、

訪れていながら句を作っていない歌枕も多い。むしろ伝統的な歌枕表現を避けているのではないかと思われるほどである。もっとも、芭蕉は古びた歌枕にはもはや惹かれず、それに代わる俳枕を創出しようとしたのだと見る向きもあろう。しかし、そうした意図を持っていたとするならば、地名句の割合はもっと大きくなったはずで、そのような観点からすれば『おくのほそ道』の地名句はけっして多くない。石川によれば、芭蕉は『おくのほそ道』の旅を終えて以後、再び地名句が少なくなっていく傾向にあるというが、それを見ても、地名句それ自体は芭蕉の目指すところではなかったのだらう。黒髪山での句など、いくつかの地名句の作者を曾良に託しているのも、その証である。

では、芭蕉と地名句との関係をどのように捉えるべきであろうか。新しい地名句を創出する試みは、芭蕉よりもむしろ玖也の方に窺える。『道の記』の中から、地名と句のみで綴られた箇所を一部抜粋する。

琵琶首、恋慕小路などいふ所

村雨の音や琵琶首ほととぎす

忍音や恋慕小路の郭公

愛子、所の人はあやしとぞいふなる。

鶯の愛子なつかしほととぎす

聞きたがるやあやしの賤も時鳥

熊根、作並、坂下を過ぐとて

横切るや月のくまがねほととぎす

卯花のさく波に鳴け郭公

時鳥初音や坂の舌もつれ

ここに挙げた句は、すべてが地名掛詞により成り立っている。こればかりではなく、『道の記』所収句のほとんどが地名掛詞だと言ってよい。玖也以外にも、中川喜雲の『京童』『鎌倉物語』、三田浄久の『河内鑑名所記』、高野幽山の『誹枕』、前述の三千風『松嶋眺望集』など、同時代の地誌・句集類にも地名句が多く集められているが、それらと比べても、玖也の地名掛詞に対する徹底ぶりには際立つ。しかも、京や鎌倉、あるいはその周辺ならばある程度地名も知られていようが、玖也は仙台を越え、さらに奥まで踏み分けて聞き慣れない地名を自ら採集し、俳諧に仕立て上げた。のちに玖也が編纂した『桜川』にも、自作他作問わず、奥羽ばかりでなく、日本全国から集められた地名句が数多く収められている。

先に見たように、玖也は『伊勢物語』の旅をなぞること、歌枕がもはや実景としての名所ではないことを明

らかにした。その姿勢に照らすならば、こうして歌枕ではない土地の地名掛詞にこだわることも、歌枕なるものを冷静な目で捉えることにつながっているだろう。すなわち、歌枕は実景ではなく言葉(地名)にすぎない。しかし、土地の名前であるがゆえに、その場所でしか詠み得ない唯一性、つまりその場所の重みを持つ。言葉(地名)であるがゆえに、その名に意味が見出され、さらに掛詞が用いられることで、他所とは取り替えのきかない歌語となつてゆく。それが歌枕の持つ土地の呪性であり、名前の呪性であろう。だが、だとすれば歌枕ではない土地においても、地名を持つ限りその論理は成り立つ。玖也の試みは、たとえそこが名所でなくとも、掛詞を用いることによって、その土地でしか詠み得ない、その土地を象徴する句を作り出すことであったと言えよう。

しかし、そうした方法を採用したがゆえに、一面では、地名を用いた単なる地口、駄洒落としてしか受け取られない恐れがある。玖也と比べると、芭蕉の場合は一ひねり加えられている。例えば、尿前(シトマエ)の関での「蚤虱馬の尿(バリ)する枕元」がある。「馬の尿(バリ)」と「尿前(シトマエ)」と、表記の面で共通しながら発音では区別しており、単純な地名掛詞にはとどまらない。<sup>(注17)</sup>「あらたうと青葉若葉の日の光」も、「日光」そのまま

はなく「日の光」に変えている。それが文学的にどれほど高度であるかは別にして、少なくとも芭蕉は玖也の方法をずらそうとしていることが見て取れる。

尾形仿は、尿前の句が地名句として仕立てられたことについて、「単なる『山中』や『貧家』ではなく、『尿前』での句として治定せんがための心用意に出たものと見るべきであろう」とし、「あらたうと」などと同じく、「地名に引きかけた機知性に、一句の生命の一半がかけられている」とする。<sup>(注18)</sup>しかし、これが一つの方法論であるとするなら、芭蕉よりもむしろ、徹底して地名掛詞にこだわった玖也の姿勢の方がふさわしい。

芭蕉の場合、代表句とされる「閑さや岩にしみ入る蟬の声」などには地名が入っていないように、玖也ほどには地名への執着は感じられない。その一方で、『おくのほそ道』の旅の翌年に詠んだ「行く春を近江の人とおしみけり」に関し、近江ではなく丹波でも成り立つか否かの問題を去来に投げかけたように(『去来抄』)、場所性の問題を常に心に持っていた。こうした地名句をめぐる様相を見ると、芭蕉は『おくのほそ道』において、玖也的な地名句もふまえつつ、場所の治定のための新しい方法を試行錯誤しながら探していたのではなからうか。一つ仮説を述べるなら、「閑さや」のような、地名が含ま

れない句を補うものとしての地の文の必要性が、紀行文としての『おくのほそ道』の文章を飛躍的に発展させる一因となったのかもしれない。

それは憶測としても、芭蕉は『伊勢物語』に対する姿勢と同じく、歌枕を意識しつつも同地での詠句を避ける傾向が見られるように、必ずしも伝統的表現に追従せず、その性質をずらし変容させるような側面を見せており、歌枕や同種の地名掛詞とは別の次元で文学を構築しようとする意図が感じられる。

一方、玖也の地名句へのこだわりは、歌枕に正面から向き合ったものであろう。歌枕が、言葉（地名）であるがゆえに歌に詠み込まれてきたように、玖也は行く先々の土地を実景よりもまず言葉として捉え、歌枕もそうでない土地も、同等に掛詞を駆使することによって歌枕を相対化しており、芭蕉とは別の方法で歌枕の呪縛から逃れる道筋を示しているように見える。

そしてまた同時に、『おくのほそ道』にも、「しをらしき名や小松吹く萩薄」などに象徴的に示されるように、地名に着目した句が一部見られる。これは芭蕉が新しい文学を構築するための過渡的段階だったのか、あるいは玖也と同じく地名の魅力に取りつかれたのか、いずれにせよ、芭蕉ははからずも玖也が歩いたのと同じ道を進

ているのである。

#### 四 結び

こうして玖也と芭蕉を比較してきたが、このような試みがかれまでなされてこなかったのは、第一に、芭蕉が俳聖として崇められるほどの大きな存在であるために、先行俳人との比較研究が必要とされなかったこと、第二に、貞門・談林の流れに連なる玖也の作風は、一見したところでは特筆すべき目新しさが感じられず、玖也が過小評価されてきたためだと思われる。しかし、玖也と芭蕉とを対比することによって両者の特徴が明確となり、芭蕉が抱いていた新しい文学に対する意識が、玖也の中にも芽生えていたことが見えてきた。最初に述べたように、この二人に接点があった可能性をふまえるならば、両者を並べてさらに深く検証していくことで、二人が生きた時代の文学的な空気をも感じとれるようになるだろう。

だが残念なことに、玖也についてはまだ知られていない部分が多い。新たな資料の掘り起こしも含め、玖也という人物をさらに明らかにしていきたいと考えている。

注

- (1) 拙稿『西鶴名残の友』と玖也『道の記』（『名古屋大学国語国文学』第一〇二号、二〇〇九年十一月）。なお同論文において、幽霊の絵に足が描かれなくなった契機とされている円山応挙の幽霊画を、谷中全生庵蔵と記したが、カリフォルニア大学バークレー美術館および弘前・久遠寺所蔵のものの方がより適切であったため、ここに訂正する。
- (2) 志田義秀『俳句と俳人と』（修文館、一九四二年）。
- (3) 新田孝子「松山坊秀句」（『文芸研究』第四六号、一九六四年三月）。
- (4) わずかに金沢規雄『おくのほそ道』前後』（おうふう、一九九五年）が、仙台俳諧史の観点から玖也と芭蕉を並べて論じてはいるが、両者の関係を探ったり、対比したりするものではない。
- (5) 阿部喜三男『詳考奥の細道・増訂版』（久富哲雄増補、日栄社、一九七九年）、金沢前掲書など。
- (6) 『道の記』第一部（大坂・吉野・高野）によれば、玖也は柏原の三田浄久宅に一泊しており、玖也がその途上で詠んだ葛井寺・道明寺での二句が浄久編の『河内鑑名所記』（延宝七年（一六七九）刊）に収められている。これは第二部の奥羽編と直接関係するものではないが、浄
- (7) ハロルド・ブルーム『影響の不安』（小谷野敦・アルヴィ宮本なほ子訳、新曜社、二〇〇四年）。なお、芭蕉論としてこの理論を一部用いたものに、ハルオ・シラネ『芭蕉の風景 文化の記憶』（衣笠正晃訳、角川書店、二〇〇一年）がある。
- (8) 『おくのほそ道』および『曾良随行日記』の引用は、頼原退藏・尾形仍訳注『新版おくのほそ道』（角川ソフィア文庫、二〇〇三年）による。ただし、表記を一部改めた箇所がある。傍線は引用者による。
- (9) 白石憐三『芭蕉』（花神社、一九八八年）。
- (10) 以下、『信生法師日記』『十六夜日記』『東関紀行』の引用は、新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』（小学館）による。
- (11) 岡田利兵衛「松山玖也 東下り富士一見記」（『国語国文学』一九五三年四月）。ただし「東下り」という名称は発見者である岡田の命名によるものである。以下、本文の引用は同論文および『柿衛文庫資料拾葉第一集』（柿衛文庫、一九八九年）によるが、表記は一部改めた。
- (12) 楠元六男「芭蕉と『東下り』」によれば、中世においては業平を流浪の悲哀のイメージで捉える傾向にあるが、近世ではとりわけ色好みのイメージの方が強くなってゆ

くという（山本登朗編『伊勢物語 享受の展開』竹林舎、二〇一〇年）。

- (13) 『おくのほそ道』の構成を連句形式になぞらえる場合、「一つ家に」を恋の句として見る人が多いが、その形式はともかく、内容は色好みとはかけ離れたものと見るべきであろう。赤羽学は同句について、「少しの私心もまじえず、あるがままに観照しようとする態度が見られる」とし、「遊女といえども、愛欲の妄執を断てば、即刻真如の世界にはいることができる。芭蕉は遊女との同宿に何のこだわりも示さず、淡淡とした気持で『萩と月』を対比するのである」と論じている（『芭蕉俳諧の精神・拾遺』清水弘文堂、一九九一年）。

- (14) 本稿では適宜漢字や送りがなを当てたが、前稿では原文表記に近い形（濁点・句読点のみ附した）での全文翻刻を附載したので、併せて参照されたい。ただし、前稿の翻刻では表記に一部誤りがあったため、ここに訂正する。
- (誤) 聞たがるやあやしの磯も時鳥↓(正) 聞たがるやあやしの磯も時鳥
- (誤) 啼かたや目かゆく妻鹿ゆく時鳥↓(正) 啼かたや目かゆく妻鹿ゆく時鳥
- また、前稿では所収句の他出を示したが、一部記載漏れがあったため、追加分のみここに補っておく。

・吉野よく見よとはくどし花盛 ※吉野山独案内（巻一）

・花にきてのめばかつての下戸もなし ※吉野山独案内（巻三）・続大和順礼（巻二）・真蹟短冊

・秋の景やもろこしが原日本一 ※八嶋紀行に類句（中七）「三本松や」

・待月や首長うしてつるが岡 ※梅翁宗因発句集

・波まよりみえし小嶋や初颯 ※落花集（冬・初颯）

・いり大豆や鬼ともいはず片手打 ※落花集（冬・節分）

上五「年豆や」

- (15) 石川真弘『蕉風論考』（和泉書院、一九九〇年）。

(16) 幽山や三千風も諸国を行脚したが、おそらく彼らが求めたのは新たな「名所」であり、本稿が扱う「地名」とは少し異なる。玖世の旅が観光文化につながっていくのは間違いないが、本稿の論点から外れるので、その関係については本稿では触れないこととする。

(17) 近年発見された、芭蕉自筆本ともされる中尾本にルビが振られていることもあり、現在では「尿する」は「バリする」の読みで確定しつつあるが、それまでは地名「尿前（シトマエ）」の読みに対応させた「シトする」の読みの方が優勢であった。近世の古注釈では逆に「尿前」を「バリマエ」と読ませようとしたものもある（『おく

のほそ道鈔』など。つまり、地名そのままの音で詠み込み、音を対応させることが通例なのであり、これを芭蕉があえて「バリする」と読ませ、「尿前（シトマエ）」と区別しようとしたのであれば、破格を試みたものと見る事ができよう。

(18) 尾形仂『おくのほそ道評釈』（角川書店、二〇〇一年）。

〔附記〕 本稿をなすにあたって、東北大学附属図書館の高配により、『松山坊秀句』の現物閲覧の機会を得た。ここに記して謝意を表す。

(やまだ・かずのり／センチューリアム)